



## 秋の火災予防運動(避難訓練)

毎年11月9日から11月15日までの一週間全国一斉に「秋の火災予防運動」が実施され、本園では、この運動に合わせて、園で火災が発生したとの想定のもとで避難訓練を実施しています。

火災を想定した避難訓練では、クラスで子どもたちに次のことを指導しています。

- ・煙の吸引を防ぐため鼻や口を覆い、姿勢を低くして避難する。
- ・避難する時は「お・は・し・も」を守る。

(押さない/走らない/喋らない/戻らない)

そして、今回の避難訓練では、「園の放送機器が使えない」ことも条件に入れ、火災発生による避難を教員が園内を走り回って知らせることとしました。

すずか幼稚園では、11/14(木)に職員室横の給湯室から火災が発生したということで、給湯室周辺(1階の周辺と2階の給湯室上部分)を避けて園庭に避難することとしました。

また、第2すずかきしおか幼稚園では、11/15(金)に園の北側にある神社から火災が発生したということで、いつもとは違う経路を使っての避難となりました。災害がいつどこでどんな状況になるのか、誰もが予測することはできません。だからこそ、今、どんな経路で避難するのかあわせて先生の話をしっかり聞くことが大切ということ子どもたちと再確認をしました。

両幼稚園ともに子どもたちは真剣な眼差しで先生の指示に従って安全に避難することができました。

避難した後に「消火訓練」ということで、教員の代表が、消防署から借りてきた「水消火器」を使って消火訓練をした後に、園児の代表が「消火器型水鉄砲」を使って消火訓練をしました。水鉄砲だったとはいえ、子どもたちは真剣に消火活動をしていました。

本園では、地震や火災などの災害に備え、こうした避難訓練を実施していますが、今後も「いろいろなことを想定」して避難訓練を実施していきたいと思えます。

また、鈴鹿市消防本部の「Hi まわり分団員」さんに両園にお越しいただき、11月15日(金)には第2すずかきしおか幼稚園の年中組が、11月21日(木)にはすずか幼稚園の年中組が、「防火紙芝居」を通して、地震からの避難を学んだり、火事の時の避難の仕方を、実演を交えて教えていただきました。



## 冬眠中に出産、育児をするクマ

ツキノワグマやヒグマは、冬眠の最中に子どもを生むという不思議な習性がある。クマは、冬眠にはいる前に食べ物をたくさん食べてから穴にこもるのだが、穴にこもっても、ヘビやカエルの冬眠と違って、体温はほとんど下がらない。呼吸数や脈拍数が減ることはあっても、人間が刺激を与えたり温度が高くなったりすれば、すぐ反応できるような状態で穴にはいつているのである。



そして、この穴にはいつているうちに、出産、育児という大仕事をする。その出産も、自然のしくみをいうものは実によくできていると思うのだが、いかに食いだめをして、皮下脂肪としてたくさんのエネルギーを体に蓄えたとしても、出産、育児という大仕事の上に、ヒグマのような体重三百キロもある動物につり合う赤ちゃんが生まれ、しかもどんどんお乳をのむということになったら、とても母親はもたないであろう。そこで、冬眠中に出産する動物は、クマに限らず例外なしに赤ちゃんは非常に小さい。ツキノワグマでも三百グラム、ヒグマでも五百グラムから六百グラムと、母親にくらべたら想像もできないほど小さく生まれるのである。

子どもが生まれると、母親は穴の中で、ちょうど人間があぐらをかいたような形ですわって、赤ちゃんを股の間にポコッと入れ、上から覆いかぶさるような形で保温する。すると、ちょうど子どもが首を伸ばした位置にお乳がくる。

こうして育て、子どもが大きくなるのに反比例して母親の体が弱っていく。筋肉と皮膚の間にたくさんたまっていた皮下脂肪が減って行って、ある人の表現を借りれば、ぷかぷかの外套(がいつ)を着たおじいさんのようなかっこうになってしまう。このとき母親はある意味で疲労困憊(ひろうこんぱい)の極に達しているのである。体重は、冬ごもりの前と、冬ごもりが終わって子どもを連れて外へ出るときとは、ひどいときには二五パーセントも違ってしまふという。

このクマの例でもわかるように、母親と子どもの接触は乳離れ、いわゆる巣立ちといわれる時期までは、ほとんど完璧に近い状態にいつも保たれているのである。

(ニホ野動物園長 中川士郎 著「クマの生態(か)のメカニクス」(1)114頁)

## 都心にクマが出没する背景

市街地にクマが出没するようになったり理由は主に3つあります。

### 気候変動

気候変動はクマの生態系に大きな影響を与えています。気温の上昇が早くなり、春の訪れが早まることで、冬眠から目覚めたクマが自然界で食料を見つけるのが難しくなります。

研究によると、生息地の平均気温がわずかに1度上昇するだけで、食物連鎖に重大な変化が生じるとされています。

### 環境破壊

熊の生息域である森林が都市開発やスギの植樹によって縮小され、食料源を求めて人里に降りてくるためです。

森林の減少はクマの生活圏に深刻な影響を及ぼしています。針葉樹であるスギを植えることで広葉樹が中心であった自然の森林が縮小したことでクマの食料源であるどんぐり等の木の実は不足し、彼らの生息地が脅かされています。

研究によれば、過去10年で20%の森林が失われた地域では、クマの出没頻度がそれ以前と比較して40%増加しているという報告があります。

森林の減少はクマを都市部に押し出し、人間との遭遇を増やす原因になっています。

### 高齢化・過疎化

過疎化が進む地域では、クマの出没が増加する傾向にあります。

林業や農業に従事する人の高齢化により、手入れされずに放置された森林や耕作放棄地が増え、人間の野生動物の住処の境界線があいまいになっているためです。

特に過疎化により放置された農地や果樹園は、クマにとって魅力的な食料源となります。実際に、過疎化が進む一部地域では、クマの目撃情報が前年比で50%増加しているという報告があります。

(食品ロスゼロ マーケットのホームページより)

